談山神社蔵　法華曼荼羅について　上

宮　次　男

大和多武峰の談山神社に蔵される法華曼荼羅[1]は、法華経八巻と無量義経、観普賢経をそれぞれ九重塔形[2]に書写して、その周囲に経大意を図画し、全十幅よりなる一種の法華経変相で、一幅の大きさは縦約一三四・六センチ、横五二・八センチである[3]。その画面構成は類品きわめて乏しく、また説話画としても稀にみる珍品であるが、この曼荼羅の存在については従来一部の識者を除いて一般には知られておらず、またこれの紹介乃至研究の文献もみあたらない。しかし、わが国の説話画を考察する上から、また法華経関係の曼荼羅[4]、経見返絵[5]等の図相を研究する上に、この法華曼荼羅は見のがすことのできぬ重要な資料であることは疑いない。そこで、本稿に於いては、専らこれの紹介に重点をおき、併せて日本の説話画に於ける此の本の位置、他の法華経絵との比較などにふれて私見を述べることにする。

一

平安時代、特にその後期に於ける法華経の信仰については、ここに更めて述べるまでもなく、非常な隆盛をきわめたことは周知である。その信仰の実践として行われた諸作善の中で、造形的表現としては、各種塔婆の造立と経典の書写が特に盛行した。これらの作善は勿論当代信仰の一般的情勢を背景として行われたのであるが、中でもこの両供養は、経の読誦、解説とともに法華経の特に強調するところで、塔婆の造立については、たとえ童子が戯れに沙を聚めて仏塔と為すも仏道を成ずと説く[6]ほどで、その功徳は量り知れぬとされていた。

この造塔と写経の供養が結びついて制作されたものに泥塔経と装飾経の一種に数えられているいわゆる宝塔経がある。いま記録及び遺品に徴して例を挙げると、

永昌記　嘉承二年（一一〇七）四月十一日条[7]に

於紀州亭令書寫塔形一日法華經事、

於紀州亭令書寫塔形一日法華經、爲祈彼所勞也、明範爲講匠、

僧西念、紺紙金字供養目録[8]（保延六年（一一四〇）八月九日の奥書あり）に、

一奉六萬九千三百八十四本率都婆造立供養畢[9]

一奉迎供養書寫金銀泥塔經目錄

淺紺紙金字法花經一部　八巻

無量義經
觀普賢經
般若心經　各一卷
仁王般若經一部
其上銀塔
其中金字等也
都合并九萬七千百八
十九基　塔字也
讃佛乘抄第八(10)　追善
部の一結衆十餘輩牛瓦

挿図1　泥塔経　東京国立博物館蔵

挿図2　平家納経　宝塔品　広島　厳島神社蔵

終追善（一一八七）（文治三年八月二十一日　一結衆等敬白）の項に、

（略）仍奉圖繪阿彌陁如來像一鋪、奉造立率都婆〇本、其上奉書寫妙法蓮華經一部八卷、無量義、觀普賢、阿彌陁、般若心等經各一卷、（略）

同、為亡妻昌俊得業修之（一一九三）（建久四年五月二十二日　沙門昌俊敬白）とある項に、

（略）五七之忌忽來、仍奉圖繪釋迦如來像一躰、率都婆上奉書寫妙法蓮華經一部八卷、無量義、觀普賢、彌陁八名、般若心等經各一卷、（略）

同、

奉率都婆上一日書寫法花經五部

願文集(11)　笠置寺住侶作善（一一九四）（建久五年五月二日　佛子某敬白）に、

（略）奉造立率都婆若干基。其表裏奉書寫法花經十八部。是則爲法界所生平等利益也。

などがあり、専ら供養の為に作られたことを知る。これを遺品についてみると、扁平な泥塔一塔に一字を刻して経文の書写に用いた泥塔経としては、東京国立博物館（挿図1）、智積寺ほか個人蒐蔵になっている遺品がかなりある。また、宝塔経では、京都安楽寿院旧蔵の一字一塔法華経（一一六三）（長寛元年銘）、栃木輪王寺蔵の一字宝塔法華経、長野戸隠神社蔵の一字一塔法華経、更にこれの残欠の戸隠切や太秦切、法隆寺切など古筆切として伝存している。この他、東大史料編纂所蔵の一句一塔経があり、一行に一塔を当てたものとして平家納経の宝塔品（挿図2）や般若心経（仁安元年銘）（一一六六）の遺例などみることができる。

本稿に於いて述べようとする法華曼荼羅もまた、かかる信仰態度に基くものであるが、類品の少ない点、まことに注目に価する。経典を書写

して塔形を形成した作品としては、岩手中尊寺蔵の最勝王経十界宝塔曼荼羅十幀[12]（挿図3）は、写経の特殊な遺例として早くから世に知られていた。しかし、このような字塔形式の写経はわが国独自の造形ではない。京都教王護国寺には「己酉十二月　神孝寺典香道人」の願文を有する高麗の法華塔経[13]（挿図4）があり、その銘文には「童子聚沙之戯成道。況寫蓮經塔之其福報不可量云々」とあって、造塔供養と写経精神の造形的結合を如実に示している。更に大英博物館にスタイン将来として、般若心経を塔形に書写したのが三例[14]S. 4289（二例）、S. 5410（挿図5）あり、中国、朝鮮、日本と三国にわたって、かかる造形が行われたことを知る。仏教信仰史の上から、また美術史的にもまことに興味深い遺品である。

更にこの字塔について注目すべきは、これら三国に於けるそれぞれの遺例の製作過程である。すなわち、塔形をなす字の配列法をみると、わが国の二例は共に相輪の中心上端から書き始めて順次下降し、最後は基壇下辺に終るが、高麗本は初層長押の中央、本尊の真上から右方に書き始めて、先ず下降し、最下段に至ると再び初層の上部にもどり、順次上昇して頂上に至っている。またスタイン本は基壇の上端中央から始まって、下方へ斜に降りて一たん最下端に至り、次に上方へ斜行しながら昇り、頂上にて反転し斜行しながら下降し、再び基壇に至って塔形を作っている。これはまことに複雑な構成であるが二例とも同じ配列である。また、スタイン本の他の一例は相輪の部分しか書いてない未完成品であるが、その部分は他の二例と同字であって、

挿図3　最勝王経十界宝塔曼荼羅（第九塔）　岩手　大長寿院蔵

挿図4　法花経文字塔　京都　教王護国寺蔵

これにより、これらスタイン本の形成は経初から字句を追って書くのではなく、一定の形通りにただ字を列べるという方法で作られていることが想定される。なお、現存遺品で知られているものでは、中国、朝鮮の両本はともに経変を伴っていないが、日本の二例はともに詳細な変相が字塔の周囲に描いてあって、幅全体が一つの経変相としての性格をもっている。中尊寺本、談山神社本ともに曼荼羅の名称が付けられているのも理由無きことではない。これらはまた信仰的に云っても、造塔、写経解説の作善を併せ行うものであって、これが意味するところ甚だ深いものがあると云うべきであろう。

二

既に述べたように、この法華曼荼羅は十幅とも紺紙に金銀泥[15]で描かれている。画面は縁辺に約一センチ幅の唐草の文様帯を描いて区画し、その中央に字塔を置き、周囲に経大意を描いた一種の法華経変相である。字塔は金泥で書かれているが、予め型様のもので塔形を定め、字の行間を鉄筆で線引きして[16]、字の配列が指定されている。その書き出しは相輪の中心頂上から始り、相輪、第九層屋根と順次下方へ進んで、基壇最下辺右端で終るが、最後のところは、各巻の巻末にある経名、巻数（例、妙法蓮華経巻第一）でもって必ず終るように計算されている[17]。従って、塔初層乃至基壇でその調整がとられている。

挿図5　般若心経文字塔 S. 5410
ブリティッシュ・ミューゼアム蔵

字塔周囲の図様で各幅に共通のものについて述べると、字塔の上空にはこの塔を供養する意味で、飛天、リボンをつけて飛ぶ楽器、散花などがあり、塔下には鷲峯山（耆闍崛山）下の釈迦説法会の有様[18]が示されて、この経が釈迦により耆闍崛山中で説かれたことが表わされている。字塔の両側にはそれぞれ経の大意が図画されるが、字塔と接する部分を海に見立て、海波を随所に描いている。従って左右の場面は塔高に沿って虚空に浮ぶものではなく、塔とは地続きであることが直ちに理解される。換言すればU字形の陸地の底辺に塔が立ち、塔の背後は海になっているように表わされている。この表現法はまことに合理的というべきで、そこに描き表わされる事相――それも多分に説話性をもつ――の舞台を明確にするものである。

また、この幅では日本の説話画でしばしば見られる霞の使用は全く行われていない。従って画面は鮮明にして明快な印象が強い。このことは前記の合理的な構成法とともにこの曼荼羅の大きな特色の一つである。

これら周囲の絵は、紺紙経見返絵にみると同様に、金泥を主とし銀泥を従として描かれる。しかし、通常の紺紙経見返絵と異って、仏、菩薩や人物の顔、肉身部は金泥で塗りつぶした上に目鼻や手足の指などの細部を墨で描き起し、更に口を朱点で表現[19]しているのであって、この手法は他の紺紙経見返絵には殆んどみられないところである。なお、この口

に朱を用いることは、動物に於ても同様であって、厳密に云えば、この曼荼羅は金・銀・朱・墨が顔料として使用されているわけである。

このようにして描かれた字塔周囲の絵は、再三述べたように、経の大意を表わしたもので、その内容は各幅ともかなりの数の場面なり情景に分かれている。各場面には短冊ないし色紙の形にそれぞれ図相の説明に必要な経句が題されている。この題辞はその図相の内容によって、経の長行と重偈が区別なく共に用いられているが、[20] 誤字ないしは経句の省略はあっても、原則的に改変されたところは認められない。またその図様は忠実に経句と一致した図相となっているので、これらによって、そこに表わされた主題なり内容は比較的容易に知ることができる。

しかし各幅の画面にはいずれも数品の内容が六乃至四五場面に分かれて、しかも錯綜して配されているので、各図の相互関係を理解することは容易ではない。そこで、きわめて便宜的ではあるが、各幅について挿図に示すように、右上端より順に題辞に番号をつけて、それを解読し、更に経文に則して品別に整理することによって各品の場面を把握した。以下、この方法によって本曼荼羅に於いて図画された法華経二十八品及び開結二経の大意を考察する。

註

1　この曼荼羅の箱には左の墨書銘がある。

〔箱蓋表〕

法華曼陀羅十幅之箱　　念誦嵬
紫蓋寺

〔同裏〕

奉奇進法華曼陀羅十幅之表具并箱
承応四年乙未二月五日　京都猪熊荒神
大阿闍梨法印實祐

また、巻三の表装裏に左のような墨書の修理銘がある。

法華曼陀羅　拾掛
右修覆之　長谷表具屋甚七
寄附人　世話人梅之坊淨雲
同十字坊　中尾坊　梅之坊
岩室　竹室　小五太院(大)
梅室　以上
享和貳戌歳　六月　日

現在この曼荼羅は十幅共、昭和二十八年六月に石田茂作氏が談山神社より借り出されて以来、東京国立博物館に寄託中である。

2　十層のようにみえるが初層には裳階があるので、建築的には九層である。

3　各幅の寸法は左の通り（単位センチ）

巻名	縦	横
巻1	133.3	52.8
2	133.5	52.8
3	134.6	52.6
4	134.3	52.6
5	134.4	52.8
6	134.5	52.6
7	133.6	52.8
8	134.1	52.6
開経	132.3	52.5
結経	131.7	52.5

4　法華曼荼羅と名づけられるものに、密教における法華経法のために作られたものと、経意絵として作られたものの二種がある。前者は八葉蓮華の中心に多宝塔内二仏並坐像を置き、周囲に諸尊を配置したもので成就妙法蓮華経王瑜伽觀智儀軌一巻（不空譯）、法華曼荼羅威儀形色法經一巻（不空訳）、法華曼荼羅諸品配釋一巻（円珍）などに基づくものである。諸種の図像集に法華法として描かれ、遺品としては、唐招提寺本、太山寺本、下部神社本、横蔵寺本が知られている。後者では、長谷寺法華説相図銅板をはじめ、ボストン美術館本、海住山寺本、本法寺本、本興寺本が有名であるが、談山神社本はこの後者に属するものである。ここで法華経関係の曼荼羅と云うのは、特に後者を指していう。

5　法華経の見返絵は云うまでもないが、他の経典にも法華経関係の絵が描かれている場合がある。石田茂作氏「中尊寺大鏡」第三　経蔵篇一一頁解説参照。

6　方便品第二。

7　史料大成38　八四頁。

8　三宅米吉氏、津田敬武氏「院政時代の供養目録」(帝室博物館学報第四冊・大正十三年十二月)による。

9　註8の文献一七頁に「此の数は法華経及び開結二経の字数なること拾芥抄に見えたり。されば一本に一字宛是等の経文を書きたる小塔なるべし」とあり、また辻善之助氏「日本仏教史上世篇」もこの説と同じ(同書六五二頁)。

10　藤田経世氏「校刊美術史料」第五四輯による。

11　続群書類従第二十八輯上釈家部五二三頁。

12　紺紙に金泥で字塔を書写し、周囲に経の大意を彩画する。「中尊寺大鏡」第二　仏像曼荼羅篇に詳細な写真が掲載され、石田茂作氏の解説がつけられている。

13　これは東寶記第三佛寶下　西院の西院安置本尊聖教等追加目録(続々群書類従第十二宗教部六一頁による)に、

八祖影像八鋪淨寶上人願堅摸、岡東寺寶藏正本、此内高祖真影者、後宇多院宸筆也、

六觀音像六鋪此内如意輪像欠闕、高麗繪様也、

法花經文字塔圖一鋪　高麗本

とある「文字塔圖」に相当すると考えられる。

なおこの法華経については近く詳細を紹介する予定であるが、願文にある「己酉十二月」の年記は、結論的に云って、高麗末、恭愍王十八年(一三六九)と考えられる。熊谷宣夫氏、末松保和氏の御示教による所大きい。

14　この遺例の存在については田川孝三氏及び熊谷宣夫氏の御示教により知った。

なお Giles, L., Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum, London, 1957, p. 35 によると、

1470. *Panjo po lo mi to hsin ching*. Written with dotted lines connecting the characters so as to form an image of Avalokiteśvara. *Verso*: Begin. of the sams as recto. Fairly good manuscript in Stein Collection. mounted on a scroll. 47×22 cm. S. 4289

1471.—佛說 prefixed to title. Written in a fanciful shape, and with dotted red lines joining the characters so as to present the outline of a pagoda. Mounted as a kakemono scroll. 22 cm.×$1\frac{1}{2}$ ft. S. 5410

と記述している。S. 4289 は観音の形をするものとあるが、これは誤りで塔形である。挿図5は東洋文庫蔵のマイクロフィルムより転載させて頂いた。更に伊東卓治氏の御教示によると、書風からいって S. 5410 の方がやや古体であるが、共に唐末五代の頃と推定される由である。

15　しかし画面は全体に緑がかった色調を帯びたものとなっている。これは主要顔料の金泥が銅を多く含んだ、金の純度の低いものを使用したため、このように変色したと考えられる。

16　行間に鋭利な刻線の跡がみられる。

17　中尊寺本はこのように最後の経句で終るようになっておらず、不足分は重複して書き続けるだけである。

18　観普賢経には鷲峯山は描かれず、天蓋のように広がった宝樹が描かれている。これはこの経が大林精舎の重閣講堂で説かれている為であろうか。

また聖衆中の脇侍菩薩が騎獅文殊、騎象普賢と明瞭にわかるものと、その形相から尊名を定めることのできないものの二種があり、前者は巻一―四、七、八の六幅である。

19　談山神社蔵細字法華経見返絵はこれと同手法で仏、菩薩が描かれている。また鎌倉後期乃至南北朝の白描絵巻(例　枕草紙絵、豊明絵等)が人物の口だけに朱を用いるのと同じ手法で、両者の関連が想起されて興味がひかれる問題である。

20　法華経の殆んど全ての品は、散文で書かれた長行と、その内容を再び韻文で表わした重偈よりなっている。従って、同内容が二度書かれているわけであるが、題辞ではこの重複はさけている。

三

この曼荼羅十幅は法華経八巻の夫々一巻ずつと、開経の無量義経、結経の観普賢経にそれぞれ一幅を充てて作成したものであるが、法華経各品の配置は原則的に塔下の説法図を基点として「の」字を書くように配列されている(詳細については後述する)。次にこれら各幅について考察するが、記述にあたっては凡例に示す要領により書き表わすことにする。

凡　例

一　各幅は品別に分類した。題辞は経文の順に整理し、題辞番号を記入して画面上の位置を示した。

一　重傷の部分はその内容に応じて長行の位置におき、経説の筋を通した。また（傷）を終句につけてこれを示した。

一　経説の内容と図相を一層明らかにするために、題されてない経句も必要に応じて〔　〕中に補入した。

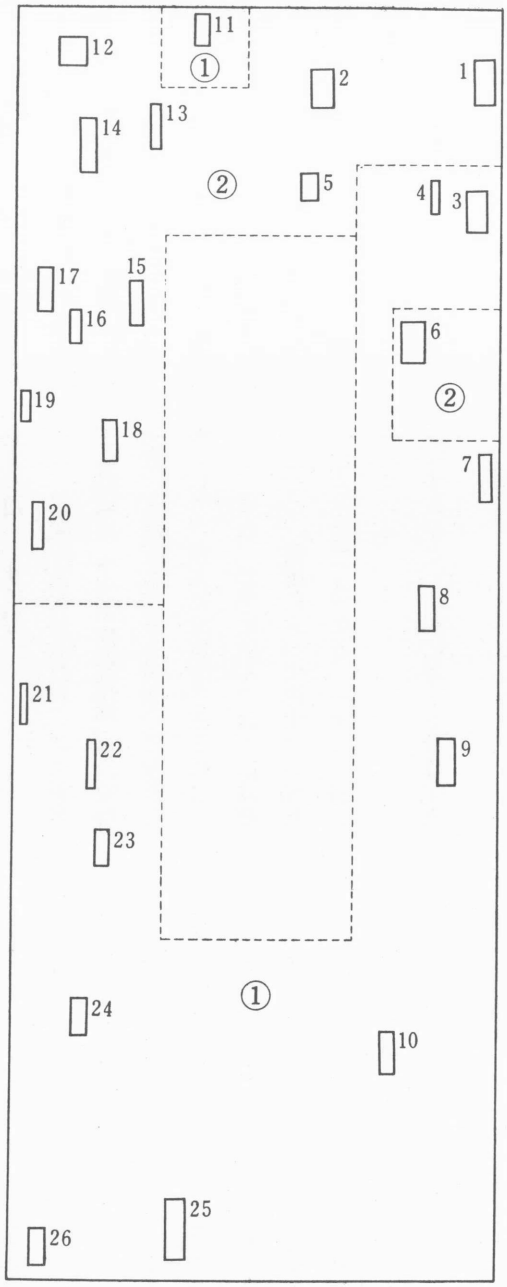
一　経本文と照らして一たん切れる所には（　）中に大正大蔵経第九巻法華部の頁数を入れ、本文上の位置を示した。一見連続する文章でも、これがある所では経文が省かれているわけである。

一　刊本（大正大蔵経所収）との相違は右側に小字でこれを示した。

一　題辞中剝落消滅した文字は、経本文と対照することにより殆んど全て解読されるので煩雑をさけるため、特に不明な部分以外はこれを示さなかった。

一　図相の説明では題辞番号を（　）中に入れて題辞との関係と画面における位置を示した。

一　註は各幅毎に、その末尾に付けた。



b　同　見取図

挿図6a　法華曼荼羅第一幅　奈良　談山神社蔵

第一幅—巻一（挿図6a・b）

序品第一　ここで描かれる主題は、釈迦の放光瑞とその光に照し出される他土の六瑞、及びこの諸瑞相の意味するものについての弥勒菩薩の問に対する文殊師利の答である。

前者については、

10眉間光明　照有東方（千）万八千土　皆如金色（二下・傷）

26下至阿鼻地獄。

11 上至阿迦尼吒天。（二中）

25 六道衆生　生死所趣（覩）　善悪業（主）縁　受報好醜〔於此悉見〕

8 又見諸佛　聖衆師子　演説經典　微妙第一（二下・偈）

23 復見諸佛八（般）涅槃者

7 復見諸佛般涅〔槃〕後以佛舎利起七寶塔（二中）

9 〔我見彼土　恒沙菩薩　種種因縁　而求佛道〕或有行施　金銀珊瑚〔眞珠摩尼（中略）〕歡喜布施　廻向佛道（三上）

3 我見諸王　行（往）詣佛所　問无（無）上道　便捨樂土　宮殿臣妾　鬚除鬢髪　而被法服（三上）

21 〔又見菩薩　勇猛精進〕入於深山　恩（惟）佛道

22 〔又見離欲　常處空閑〕　深修禪定　得五神通（三上）

4 〔又見佛子　未嘗睡眠〕　經行林中　勤求佛道（三中・偈）

字塔の下にある鷲峯山の釈迦説法像からは、眉間の光明が放たれ、諸の世界に光線が至り(10)、上方の雲に乗る阿迦尼吒天(11)、下方の阿鼻地獄(26)をはじめ、下の方に飲水が火となって苦しむ餓鬼、また互に相争う異相の修羅などの悪趣(25)が描き出され、更に他土の六瑞として、衆人に説法する三尊仏(8)仏涅槃(23)、多宝塔を礼拝供養する衆生(7)、また、邸宅に住んで諸人に諸種の財宝を施す富者(9)、仏前にて剃髪する王(3)、深山に入って禅定する比丘(21)、山間で禅定する比丘(22)、樹下を経行する比丘(4)など、いずれも諸菩薩の仏道を求める姿が様々な情景に表わされている。

次に弥勒菩薩の、これらの奇瑞は何を意味するかという問に対する文殊師利の答は、

24 〔今佛世尊。欲説大法。〕　雨大寶（法）雨。吹大寶（法）螺。〔擊大法鼓。演大法義〕（三下）

すなわち、文殊師利は、過去の諸仏が曾てこのような瑞を行ったのを見たがこの光を放ちおわって、直ちに大法を説くのを聴いた。いま仏はまた衆生に大法を聞知させんが為にこの瑞を現じたのであろうと説く。図はこの文殊師利の言葉を譬喩的に経句に即して図したもので、仏殿らしい建物内にて、大太鼓を撃つ比丘、法螺貝を吹く比丘、鈴を振る比丘が描かれている(24)。そして、その描かれた位置は、鷲峯山説法の左側やや上にあって、あたかもこの説法の伴奏でもしているかのように表現されている。

この序品の図相は、最上方に雲に乗った阿迦尼吒天を描き、下方に地獄その他の悪趣を描いて、それぞれ当を得た位置づけをしているが、他の諸相は字塔の左右に散在させている。これは仏眉間の光明が、東方万八千の世界にあまねく至ることを示すための配置であろう。

方便品第二　描かれる主題は、釈迦が仏智の量り知ること能わざるを舎利弗に告げて、諸の例をあげてこれを説くこと。舎利弗の再三の願により、即ち所謂三止三請ののち、仏の出世の一大事因縁を説くにいたること。及び成道者を説くことの三つに分けられる。

第一の仏智の量り知ること能わざるについては、

2 尒（爾）時世尊從三昧（なし）道安詳而起。告舎利弗。諸佛智慧甚深無量。（五中）

13 唯佛與佛乃能究盡〔諸法實相。〕（五下）

1 正使滿十方皆如舎利弗　及餘諸弟子　亦滿十方刹　盡思共度量　亦復不能知

17 辟支佛利智　無漏最後身〔亦滿十方界〕　其數如竹林（中略）莫能知少分

16 新發意菩薩　供養無數佛（六上）

12 不退諸菩薩　其數如恒沙　一心共思求　亦復不能知（六上・偈）

字塔右側の上方に鷲峯山下の釈迦説法集会(2)を描き、更にこれに対して左側上方に二仏の並坐を示し(13)、諸法の実相を究尽する仏を表す。そして、庵舎に住む比丘に参ずる比丘を描いて(1)、舎利弗の如く知慧ある僧も知ること能わざるを示し、菩薩が菩薩に礼拝するのを描いて(16)、新発意の菩薩を表し左側上方に雲上に坐す五菩薩を描いて(12)、恒沙の如き不退の諸菩薩を表わし

ている。

次に三止三請ののち仏出世の一大事因縁を説く段に及ぶわけであるが、その前に、増上慢の徒が法会から退場する有名な話があり、それにつづいて本題に及ぶ。

5〔會中有〕比丘比丘尼優婆塞優婆夷五千人等。即從座起禮佛而退。〔所以者何。此輩罪根深重及增上慢。未得謂得。未證謂證。有如此失。是以不住。世尊默然而不制止〕(七上)

6〔諸佛世尊。〕欲令衆生開佛知見。〔使〕得清淨故出眼現於世(中略)欲令衆生悟佛知見〔故出現於世〕(七上)

字塔右側の上方にある鷲峯山説法会(2)につづいて、丘を隔て下方に、頭布や笠をかぶった人々が海沿いの道をぞろぞろ退場してゆく有様に描かれ、増上慢の徒の退場を示す。次に、仏出世の一大事因縁は、直接図示されず、屋内で宝珠を中央に置き、そのそばで秤で計量する者、庭でこれを礼拝する者などが描かれている。題辞と図様が結びつき難いが、仏智の量り難きを意味するとも考えられよう。

次に過去に於ける成道者を具体例をもって示す。

20〔諸佛滅度已　供養舍利者　起萬億種塔(中略)〕　或有起石廟　栴檀及[沈]水(八下)

15乃至童子戲　聚沙爲佛塔〔如是諸人等　皆已成佛道〕

19若人爲佛故　建立諸形像　刻彫成衆相　皆已成佛道(八下)

18[彩]畫作佛[像]　百福莊嚴相　自作[若]使人　皆已[成]佛道(九上)

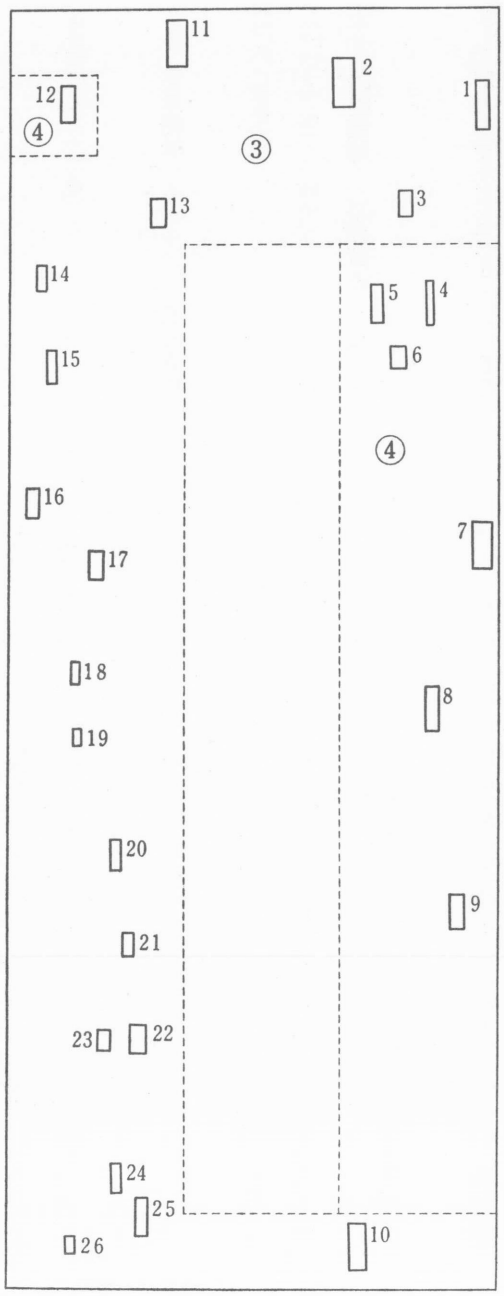
14若人於塔廟　寶像及畫像　以華香旛蓋　敬心而供養〔若使人作樂　擊鼓吹角貝　簫笛琴箜篌　琵琶鐃銅鈸　如是衆妙音　盡持以供養　成以歡喜心　歌唄頌佛德　乃至一小音　皆已成佛道〕(九上・傷)

以上の題辞に相当した図相がそれぞれ描かれるわけで、左側上部に多宝塔を建立している場面(20)、石を積み重ねて塔となす童子(15)、仏画を描く人、及び仏像を彫刻する人が同一家屋でそれぞれ制作し(18・19)、また、多宝塔の前で、奏楽、或は賛頌を唄う人、花を捧げる人など供養の光景(14)が示される。なおこの多宝塔の供養は、題辞よりも、その後に続く経句を表現しているとみるべき図様である。

第二幅—巻二(図版Ⅲ、挿図7)

譬喩品第三　ここに描かれる主題は、火宅の譬、即ち、三界を火宅に譬え、三乗を羊、鹿、牛の三車に譬え、一仏乗を等一の大白牛車に譬えた法華経中、最も有名な譬喻と、この譬喻に対応しながら一仏乗を説く合譬である。

22〔長者見是大火從四面起。即大驚怖。而作是念。〕我雖能於此所燒之門安穩隱



挿図7　法華曼荼羅第二幅　見取図

得出（一二中）

23〔我身手有力。〕當以衣裓。若以几安。從舍出之（一二中）

24而諸子等　恥和湎嬉戲（一四中）

10告諸子等　我有種〻　珍玩之具　妙法好車　羊車鹿車　大牛之車　寶今在門外（一四中）

25諸佛聞說　如此諸車　卽時奔競　馳走而出（一四中）

16長者見子　得出火宅　住於〔四衢〕　座師〔子〕座（一四中）

17尒時諸子　知見安座　皆詣佛所　而白父言　願賜我等　三種寶車（一四下・偈）

3〔爾時長者〕各賜諸子等一大車（一二下）

以上が火宅の譬喩として描かれるところで、幅の左側下に塀を廻らした邸宅があり、その屋根から火焔が吹き出ている。庭では火事になったことも知らず人々が童子を中にして立ち群り、その童子は顔面に微笑をうかべている。これは何かの遊戯と思われる。また、門の下には天を仰ぐ童子や、ただ立っている童子が描き添えられている。これは父の言葉によって火宅を出た童子とも思われる。（22・23・24・25）この火宅の有様は、経の重偈によると、邸内には悪獣、毒蛇がはびこり、また建物は朽損はなはだしく、三界諸悪の集積したものとして説かれているが、本図ではこのような諸悪は描かれていない。[21] さて、門外やや遠い所に羊、鹿、牛の三車が列んで走っており(10)、題辞(25)によると、諸子が火宅から走り出てくるはずであるが、その姿はここには描かれない。この童子達は、その位置から題辞でもって代置されているとも考えられる。

門外に逃れ得た童子達は、従童を具して椅子に坐した父のもとに集る(16)。この光景は火宅の上方に、合譬の図四場面を隔て位置する。更に字塔の右側上部に、諸子に与えた等一の大車が多くの童子を乗せて引く牛車で表わされている(3)。これは経に諸子是の時、歓喜踊躍して、是の宝車に乗って四方に遊び、嬉戯快楽して自在無礙ならんが如しとある情景を写したものと考えられる。

火宅の譬喩に合せて舎利弗に説く合譬としてここに取扱われるものは、

18・19・21・26〔三界無安　猶如火宅　衆苦充滿　甚可怖畏　常有〕生老　病死〔憂患〕（一四下・偈）

15〔貧窮困苦。〕愛別離苦。

20怨憎會苦。〔如是等種種諸苦〕（一三上）

14求不得苦（経にこの句は無いが「貧窮困苦」に相当する語句と考えられる）

11欲〔速〕出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子爲求羊車出於火宅。（一三中）

2樂獨善寂深知〔諸〕法因緣。是名辟支佛乘。如彼諸子。爲求鹿車出於火宅。（一三中）

1利益天人度脱一切。是名大乘。〔菩薩求此乘故名爲摩訶薩。〕如彼諸子爲求牛車出於火宅。（一三中）

13〔與諸菩薩　及聲聞衆〕乘此寶乘　盡迎道場（一五上）

これらの事項が二区に分けて描かれる。すなわち字塔の左側に諸苦悩が示され、左右の上部に三乘の車が示される。左側中程より下に出産(18)にて生苦、腰をまげて歩く老人(19)、口から汚物を吐瀉する病人(21)、火宅を隔ててその下に死者を尋ね来る人々(26)の生老病死が上から下へ順次位置し、中程の長者と諸子再会の場面より上に、男と三児を後にして、馬に乗って別れゆく女性―愛別離苦(15)、手を合わせ、命乞いする男を馬上から射る者、後から槍で突こうとする者―怨憎会苦(20)、更に、山間を荷をかついで旅する者を描いて「求不得苦」(14)と題し、経に云う「貧窮困苦」を、諸処を求め歩く姿で示す。

三乘の車に関する図としては、字塔左側最上部に僧(声聞)の坐す庵舎の前に羊車(11)、右側最上部に、同じく僧(辟支仏)の坐す庵舎の前に鹿車(2)、その下に、菩薩形の前に牛車(1)を描いて三乘を表し、左側の(11)の下に多人数の乘る牛車を走らせて(13)、一仏乘を示す。そしてこの乘は前述の童子の賜った等一の大白牛車(3)と対応する位置に配置して、仏の所説を明示する。

以上が譬喩品にて描かれた諸相であるが、火宅の譬喩と合譬の事相を巧に混じながら、全体としてまとまりをつけていることは見逃せない。すなわち「三車一車」は上部にまとめ、また火宅より逃げ出した諸子が父と再会する場所を三界諸苦の真中に置くなど、配置の上からも工夫が凝らされ、深遠難解な経説を視覚的にわかりやすく絵解きしている。

信解品第四　この品では長者窮子の譬喩をもって、仏の大慈悲を説くわけであるから、その図相もまたこの長者窮子の物語を主題としている。

6〔譬若有人〕年既雖幼稚。捨父逃逝（一六中）

4年既長大加復窮困。〔馳騁四方。以求衣食。〕（一六中）

5〔爾時窮子　求索衣食〕従邑至邑　従國至此國　現或有所得　或無所得（一七下・偈）

7使者執之兪急強牽將還。干時窮子自念。无無罪而被囚執。此必定死。轉更惶怖。問悶躄絶避地。（一六下）

8即脱瓔珞細軟疎上服〔嚴飾之具。更著麁弊垢膩之衣（中略）〕以方便故得近其子。（一七上）

12我年老大而汝小壯。汝常作時无無有欺怠〔瞋恨怨言。〕（一七上）

9即聚親族　國王大臣　刹利居士　大於此大衆　說是我子（一八中・偈）

この長者窮子の図様は字塔右側に上から下へと縦長に展開する。上部では、水辺をさまよう幼児(6)、その上で、戸口で施物を乞う窮子(4)、荷物を背負って旅する窮子(5)、及び海を隔てて、字塔の左側に移り、遠国に渡った窮子が他国の人から施を受ける姿(12)(この題辞は長者が窮子に語る言葉で、図様と合わない)などの諸情景が描かれ、諸国放浪の窮子を示している。父の長者と再会して以後の窮子は、右側の大部分に示される。すなわち、上から、父の窮子探索の使者に執えられ、父の前で施物を賜り、その場から一たん放されて地に伏す窮子の三情景が連続的に描かれる(7)。更にその後長者の家にやとわれた窮子が庭を掃除しながら素服の父長者と語る有様(8)。及び城中にて長者が国王、大臣等にこの窮子は実はわが子であると真実を語る場面、城の背後の宝蔵から諸種の財宝を窮子に与える有様、城門の前に多くの兵士がひかえる光景が描かれている(9)。兵士の居る門外には法輪が地上に多数描かれて、この場にも仏の妙法が及んでいることが示されている。

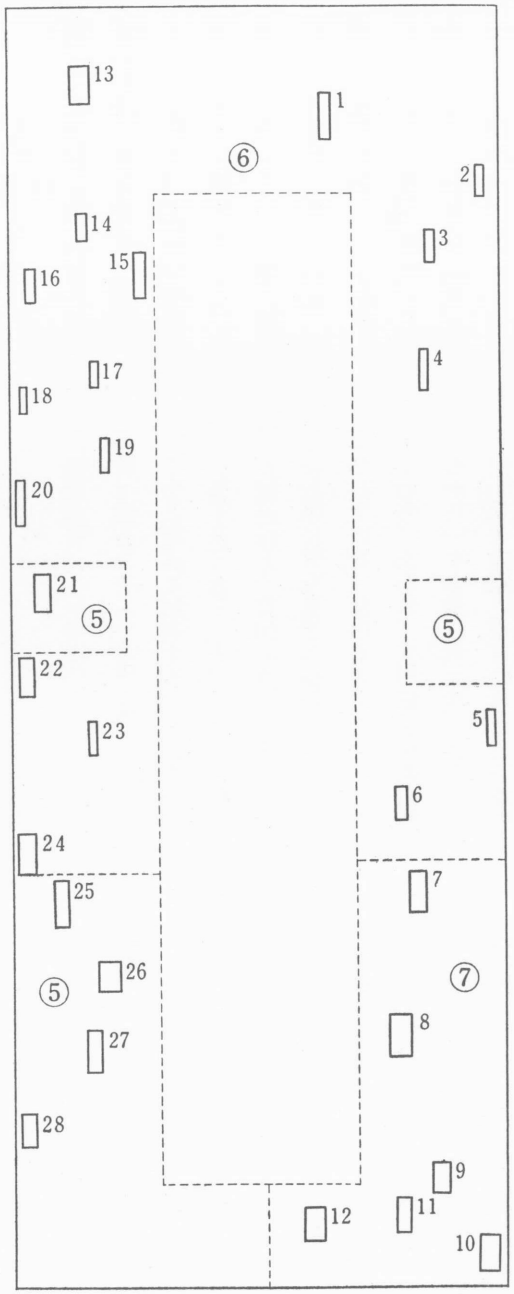
以上が信解品に因んだ図相であるが、この品の場面は長者窮子の譬喩で一貫しているために、物語の筋の展開を示すことも留意されている。従って、説話の進展があたかも連続的構図をもつ絵巻のように図示され、時には異時同図的な構成を示している。この事は、法隆寺蔵の玉虫厨子台座側面の両画面を思い起すまでもなく、仏教説話画として予想され得る画面構成であるが、大画面の中で、しかも他の主題が散在する間に、一貫した筋の発展を示す点、まことに興味が引かれる。この場合、他品の諸情景は、一つの添景或は背景として観るべきで、これらが存在することによって、一そう豊かな情景となり、また豊富な内容を持つことができるわけである。このことは、立場をかえて譬喩品の側に立っても同様で、両品の図相が相互に補い合って、一つの画面を形成していることは見逃すことができない。

註

21　本法寺本及本興寺本法華曼荼羅、岩崎家蔵妙法蓮華経壱部并画変相には悪獣、猛禽、毒蛇等が邸内に描かれている。また松本栄一氏「燉煌画の研究図像篇」（一一四頁）によると、燉煌壁画の法華経変相にもこれらは描かれている。

第三幅—巻三（挿図8a・b）

薬草喩品第五　ここでは「三草二木」の譬喩が絵の主題として取扱われている。すなわち、人天と二乗を大、中、小の薬草に譬え、上根、下根の菩薩を大小の樹に譬え、仏の平等大慧を一味の雨に譬え、三千大千世界の草樹が悉く一味の雨により平等にうるおされ、生長するを説くものである。



b　同　見取図

挿図8a　法華曼荼羅第三幅　奈良　談山神社蔵

25 常行（重複）〔禅定〕〔得縁覺證　是中藥草　求世尊處〕我當作佛　行精進定　是上藥草

28 求世尊處　我常（當）作佛　行精進定　是上藥草（重複）（二〇上）

21 安住神通　轉不退輪　度无（無）量億　百千衆生　如是菩薩　名爲大樹（二〇上―中・偈）

以上が題辞であるが、三草二木のうち、小樹を欠いている。しかし「上薬草」が二箇所にあり、図様と題辞が齟齬する所もあって、このうち一つは小樹に相当する図相と考えられる。

さて、これらの図様は字塔の左側下部に描かれている。先ず小薬草は雲上に天部形が坐す図(27)で示し、中薬草は庵舎にあって諸人から礼拝されている僧形(26)、上薬草は一人庵舎にあって禅定する僧形と、崖下に坐す菩薩形(25)で示されるのと、頭頂に鳥を止まらせる持笏の俗体とその前に対坐する男女(28)の両図が示されている。このうちのどちらかが小樹の図相と思われるのであるが、鳥を頭頂に止めている方の図は「又諸佛子　専心佛道　常行慈悲　自知作佛　決定無疑　是名小樹」(二〇上)に合う図様とも考えられる。大樹はやや上方の授記品諸図の間にあって、樹下に僧俗に囲繞されて坐す菩薩形

27 〔一切衆生　聞我法者　隨力所受　住於諸地〕或處人天　轉輪聖王　釋梵諸王　是小藥草

26 知〔無漏法〕〔能得涅槃〕起六神通　及得三明　獨處山林　常行禪定

(21)で表わされている。

以上が「三草二木」に因む図相であるが、このほか、薬草喩品に因むと思われる図様として右側の中央よりやや下に、庭前の草花を取って室内の王侯に捧げる図がある。これに相当する題辞がなく、確証は得られないが、諸々の薬草が法雨を得てよく茂った事を示す図様ではないかと考えられる。更に附言すれば、屋内の王はすなわち仏であり、よく生長した薬草(衆生)を得て自ら歓喜する情景とも考えられなくはない。

扨て、これら薬草喩品の図様は、前品の如く一貫した筋がない。また、この品の経意絵で、経見返にみる図相として、草木の上に雨が降る情景が最もよく用いられるのであるが、本幅にはこの図様がないのは注意される。このことは経意絵、乃至経典関係の説話画の展開を考える上からも興味のひかれる問題である。

授記品第六　この品は仏が迦葉、須菩提、迦旃延、目犍連の四大声聞にそれぞれ記を授けて、如来となるべきを証明するものである。図様も従ってこの四人がそれぞれ主題となる。しかし、題辞は経句をそのまま書くのは少なく、この四人の作仏に因む行状を明示するに止まる。このような表現は十幅を通じてこの品に限られている。

字塔右側最上部に鷲峯山釈迦説法図(1)があり、これはこの品ばかりでなく、本幅の全体にも及ぶ図相である。題辞は「迦旃延成道」とあるが、仏前には二比丘が礼拝の姿で表わされ、いずれが迦旃延か明らかでない。経の内容からいえば、先ず迦葉に授記されるわけであるから、迦葉成道ともみられるが、ここでは厳密に考えるよりも、四大声聞授記の舞台の一例として示されている程度に考えてよいのではなかろうか。次にこの集会の下に、

3 四大聲聞授記所(22)

として如来の前に三比丘が礼拝している。この三僧は迦葉の授記の後、他の三人が釈迦に授記を請うている有様と考えられる。そして鷲峯山説法図に対応して左側最上部に施飯の図があって、

13 如従飢國來　忽遇大王饍　心猶懷疑懼　未敢即便食〔若復得王教　然後乃敢食〕(二一上・偈)

と題して、仏の授記を蒙れば、王の教を得て食せんが如く、即ち快く安楽になるであろうとの譬喩を示す。すなわち、大王が建物の正面に威儀をはって坐す前庭には膳が備えられ食物が山と盛られているのに手をつけず、ただこれを見つめる飢国の人々が描かれている。この図は右側の説法図とともに本品を総括する経意絵とみるべきであろう。

四大声聞の授記に関する図相は、この幅の各所に散在するもので、これをもって、ここに表わされた国土がいずれも仏国土である事を示している。以下四大声聞を各人別にのべる。

迦葉

18・19 迦葉供養佛は仏に花を捧げる迦葉。

4・14 迦葉成就衆生は礼盤上に坐し、如意を持って諸人に説法する姿(4)と庵舎にあって諸人に説法する姿(14)に表わされる。

須菩提

20 須菩提供養佛は仏に花を捧げる像。

23 須菩提成道は須菩提の姿は描かれていない。しかし、これは須菩提の仏国土宝生の、

24 其土人民皆所寶臺(處)珍寶樓閣(妙)(二一上)という繁栄ぶりと、

22 其佛常處虛空爲衆生(なし)說法という須菩提の仏国土を示す題辞と合せ考えるべきである。これらの図様は、仏が、諸菩薩をしたがえて、あたかも仏来迎図のように雲に乗って来る図様(22)と、その下に宝台、楼閣があって、人々が屋上でこの仏菩薩を礼拝し、また太鼓を撃つなど、仏を礼賛する(24)図様となっている。この二図はその中間に土坡があり、時、所を異にする図相であるが、題辞

とは別に、仏礼賛図として、同一構図内に於て観ることもできる。

16 須菩提成就衆生は礼盤上に如意を持って坐し、前の机に経を並べて諸人に説経する姿で表わされている。

迦旃延

15 迦旃延供養佛は多宝塔に花を捧げる姿をとり、

1・6 迦旃延成道は、前に述べたように鷲峯山説法(1)の形をとるのと、多くの僧俗に礼拝される如来像の姿(6)とがある。

目犍連

2・17 目連供養佛は仏を礼拝する姿(2)と仏に花を捧げる姿(12)とに表わされる。また、

5 目連成就衆生は多宝塔に花を捧げる姿となっている。しかしこれは供養仏の図相であって、成就衆生の図相とは異る。このほか題辞はないが、(4)の下に庵舎で如意を持ち、諸人に説法する比丘が描かれていて、これは他の諸図から推測して授記品所説の一図と考えられる。他図との関連から、迦旃延か目犍連かの成就衆生の図相であろう。

化城喩品第七　(図版Ⅴ)題名通り、化城の譬喩そのものを描いている。

12 我等疲極而復怖畏。不能復進。前路猶遠。今欲退還。(二六上)

11 〔以方便力。於險道中過三百由旬。化作一城。告衆人言。〕汝等勿怖。莫得退還。今大此城。可於中止〔隨意所作〕

9 若入是城快得安隱。

10 若人能前至寶所亦可得善去(二六上)

8 〔即滅化城。語衆人言。〕汝等去來寶所在近。向者大城我所化作爲止息耳。(二六上)

7 汝今勤精進　當共至寶所(二七上・偈)

図様はこの幅の下部からはじまり右上へと展開する。先ず、荷馬をひき、荷をかついだ旅人の一行(12)が、岩山の下にて馬の荷を解き、一屋に入って休息する(9・10・11)。この建物は小さなものであるが、中には両手を拡げた歓喜の態の人がいるので、恐らく導師の化作した城の一室と思われる。その上方に一大樓門があり、その上に題辞(8)があって、この一廓が化城であることを知る。樓門の彼方には荷をかつぐ旅人がつづき、遂に宝所に至る。そして多くの宝珠の置かれている建物で、これを見て歓喜する人々の有様が示される。この宝所の脇には僧形と持笏の俗形が立っているが、僧形はこの譬喩を説いた大通智勝仏の第十六王子(即ち釈迦)の未だ沙弥であった時の姿と解せられる。

以上化城喩品の図相であるが、その内容が説話性の、変化に富んだ筋をもつ関係上、表現に於いても変化、進展する情景を流走的に構成する手法をとっている。このことは他の幅に於いても見い出すことが出来るのであって、本曼荼羅の特徴とみることができる。

(以下次号)

註

22 「四大声聞授記所」は「……の所」と内容を指定説明した題辞として当本では唯一のもので、他の箇所にはない。